

## 誠意と知性の庶民宰相

宮武徳次郎

大平正芳先生逝かれて早くも一年。そのあまりにも氣せわしくかつ劇的な死は、あたかも動乱の八〇年代の幕あけを象徴するかのように人びとの胸に深く刻み込まれている。この一年、海の彼方にあつてはレーガン新政権の誕生、中東の嵐、はたまた隣国中国の田まぐるしい政変と経済の混乱。そのいすれに接しても“ああ、いま先生がおいでになれば……”の感慨にふけるのは、私獨りではあるまいと思う。自民党の要職、主要閣僚としての永い政界の経歴に比べ、あまりにも短い総理の在任だった。讃岐では、雄牛のことを“じうとう牛”といへ、あの茫然たる風貌、それはまさしく「JURI」とい牛。そのものだつたが。微笑めばあの細い眼に幼児をも引きつけ優しさが漂い、街頭の聴衆に訴えるときは、その眼に限りない憂國の情熱と、神への恐れにも似た深い悲しみが浮ぶのが常だつた。寸暇を惜しんで書に親しみ、深い造詣から相手の立場になつてます考え、誠心誠意、人の道を究めようと精進する得がたい政治家だつた。ただ一年半はあまりにも短かつた。先生の政治哲学と洞察力を、もつと多くの国民に知つてほしかつた……と、いまにしてさらに切に思うばかりである。

京阪神大平会は、代議士二期目で最下位当選だつた先生を激励するため、当時の神崎製紙社長の加藤藤太郎氏が香川県人や同窓生後援グループに呼びかけて発足した。当時は神崎製紙の工場で余合が催されたこともあり、加藤氏の並々ならぬ尽力でその基盤が確立された。加藤氏の「勇退で同郷、同窓の私が会長をお引き受けしたのは四十四年十一月のこと」で、先生はその時、第二次佐藤内閣の通産大臣であつた。爾来十余年、「」來阪の機会を

とりべ、毎年総会が開かれ、政界での「栄進」とむに発展を続け、友好の度合にも深まつていった。会の内容や「励ます会」から「大平先生を見る会」、「大平節を聞く会」と変遷していくたが、常に新鮮で含蓄のあるお話を聞くのが楽しみだった。私としても永年、会長としてその徳を受ける機会に恵まれたことは光榮であった。

先生は自らの怠慢と奢りを戒め、人に対しては親切で寛大だった。飾り気のない個性の持ち主で、ユーモアのセンスもあった。五十四年四月一日、総理就任をお祝いする太閤園での大平会で「最近は『不確実性の時代』とか『断絶の時代』とかいわれるが、私は『意外性の時代』だと思ひ。というのは意外なことがよく起きるので、例えば去年はヤクルトが優勝したり、私が総理になつたり……」とやつて、満場の笑いを誘つたのもあつた。同じあじさつのなかで「あやまちは決して犯してはならない」（総理として私は）自信のある」とは言わねばならないし、言つたことは実行せねばならない。実行したことには責任を負わねばならないので、ついつい発言が鈍つて皆様にじれつたい思いをさせてしまうが……」と、しゃみり語られた時は「本当にいい人なんだ」と改めてその人柄に打たれて涙したことを想い出す。池田内閣での「寛容と忍耐」、大平内閣の「信頼と合意」「チープガバメント」「田園都市構想」は、いずれも大平先生の哲学、思想、宗教を端的に表したものだと思つ。

時として薬業界の陳情をしたこともあるが「莫づ」とばかり考えず、与えることも考えなきや……と笑われながら、そのくせ何かと心配して頂いたものだ。お会いするたびにその人柄に触れ、恥かしい思いで別れること多かつたが、そのあとで実際にそのとすがすがしい気持ちになつたものである。いまはただ、かつて先生が旧友の死を悼んで贈られた「生きとし生ける凡ての人は結局測り知れない天命に抗することができないとすれば、天は君の回収を急ぎ、別の世界で君に期待する」というが大きい」と示したとしか思われない」……この言葉を、「などは先生に捧げて心から」眞福をお祈りするほかない。

（大日本製薬社長）